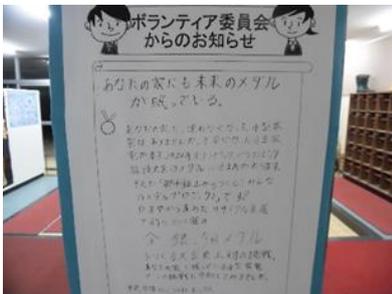


事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 茨城県 】

1 実践テーマ	【 I・II・III 】
2 実施対象者	取手市立戸頭小学校 1年78名(3クラス),2年87名(3クラス),3年78名(2クラス) 4年90名(3クラス),5年87名(3クラス),6年90名(3クラス)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 ( 道徳・学級活動・総合的な学習の時間 ) ② 行事名 ( 戸頭フェスティバル ) ③ その他 ( ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークや日常生活のマナーとおもてなしの心についての学習を通して、他者を理解し思いやりの心をもって接することの大切さや心地よさを理解し、コミュニケーション能力を高める。</li> <li>・現役パラリンピアンとの交流を通して「障がい」を正しく理解するとともに、自分自身の生活を振り返り、目標や希望をもって努力しながら生きることには価値を見出すことができる。</li> </ul>
5 取組内容	<p>(1) 国際パラリンピック委員会公認教材「I'm POSSIBLE」を活用しての授業（4～6年生全9クラス）※4年2時間、5・6年1時間</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①パラリンピックってなんだろう？</li> <li>②パラリンピックの競技種目やルールの紹介</li> </ul> <p>(2) 「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① ボランティア委員会による小型家電回収の呼びかけ(全校・保護者)</li> <li>② 回収箱の設置(常時)とフェスティバル(文化祭)での回収活動</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>(3) フェスティバルでの高学年運営企画における「ボッチャ体験コーナー」（正式ルールとは異なる）の設置（全校・地域の保幼児）</p>



(4) 共生社会に向けた、他者理解の素地を養うための授業  
 「人間関係形成を目的としたグループ・ワーク」  
 (6年生3クラス) ※1時間ずつ

講師：茨城大学大学院教育研究科教授 正保 春彦先生

内容 ・手合わせ ・聖徳太子ゲーム  
 ・ジェスチャーゲーム (遊び, 仕事) など



(5) 「おもてなしの会」(全校) ・お礼の言葉と全校合唱  
 「大切にしたいマナーとおもてなしの心」をテーマとした講演会  
 (4年生 90分)

講師：筑波大学客員教授 (グローバルマナー・スプリングス代表,  
 元日本航空先任客室乗務員) 江上 いずみ 先生

①講演内容

・CA時代の体験談 ・「おもてなし」とは  
 ・相手を思いやった正しいマナーや作法  
 (アイコンタクト・挨拶・礼・握手の仕方・言葉遣い等)

②事後学習 「感想兼お礼の手紙」を書く



(6) 現役パラリンピアンを招いての講演会（全校・保護者 80分）  
 講師：パラ陸上走高跳く日本初の義足のプロアスリート>  
 2m02 のアジア記録保持者 鈴木 徹 選手  
 (2000年シドニー大会以降5大会連続入賞, 2017年  
 パラ世界陸上銅, 2018年アジア大会銀メダリスト)

①講演内容「自分を好きになろう」

- ・ご自身のキャリア(これまでの人生, 今後の目標や夢等)
- ・「義足」についての解説
- ・児童に伝えたいこと
- ・走高跳体験(5・6年代表児童各学級1名ずつ)
- ・質疑応答
- ・お礼の言葉と花束贈呈, 全校合唱

②事後学習 「感想兼お礼の手紙」を書く



(7) 総合的な学習の時間における, インスタントシニア・アイマスク・車いす・障がい者スポーツ等の体験活動 (4年生)



6 主な成果

- (1) ボランティア委員会を中心に, 全校児童そして保護者にも「メダルプロジェクト」を呼びかけ小型家電回収活動を行うことで, 学校全体で東京2020大会への参画意識を高めることができた。
- (2) パラリンピック競技種目(障がい者スポーツ)について映像資料で学び, 実際に体験する場をつくったことで, より競技への関心が高まった。また, 障がい者スポーツの難しさを実感するとともに, 障がい者の立場になって, 補助する人やルール・場などを少し工夫すれば, 障がいがあっても健常者と同じように競技を楽しむことも理解することができた。
- (3) 体を使って人とコミュニケーションをとったり, 協力して課題をクリアしたりする「グループ・ワーク」の授業を行うことで, 恥ずかしがらず

	<p>に自己を解放したり他者を受け入れたりする喜びを感じることができ、人間関係づくりに役立った。</p> <p>(4)校内で教員同士の共通理解を図り、「大切なマナーやおもてなしの心」の講演で教えていただいたことを実践する場（おもてなしの全校合唱や挨拶の仕方等）を意図的に設けたり、日常の習慣に取り入れたりすることで、実践的態度を養うことができた。</p> <p>(5)現役パラリンピアンに来ていただき、体験を交えた講演会を実施した結果、まずは単純にその競技能力のすごさを実感することができた。さらに、障がいがあっても健常者と同様に目標や夢をもち、仲間や家族に支えられながら努力することに生きがいを感じていることを知り、そのすばらしさを理解するとともに、いろいろなスポーツに挑戦する意欲や困難に負けない勇気をもらうことができた。また、東京2020大会で実際にメダルを目指している選手と交流できたことで、今後の選手に対する関心や応援していく気持ちをもつことができた。</p>
<p>7 実践において工夫した点（事業の特色）</p>	<p>(1)本校では、児童の「相手を思いやる心」や「コミュニケーション能力」、また「自己有用感」等を育てていくことが課題として挙げられるため、「パラリンピック競技」や「マナーとおもてなしの心」に焦点をあて、自分の日常生活や今後の生き方を考えていくよい機会にしたいと考えた。事後指導では、感想やお礼の手紙を書かせることで、各自がしっかりと振り返りをできるようにした。</p> <p>(2)オリンピック・パラリンピック教育推進2年目であることから、児童が主体的に関わっていく活動や体験を増やすことで行動力や実践力を高めていくことをねらいとした。また、現役パラリンピアンにこだわって講師をお願いすることで、子どもたちにとって東京大会がより身近に感じられ今後も応援していけるように工夫した。</p> <p>(3)指導計画を立てる際には、学校行事や日々の教科指導・生徒指導等とも連携させることを意識した。また、保護者や地域にも便りやメール・ホームページ等でお知らせするようにした。</p>
<p>8 主な課題等</p>	<p>(1)講師を招く際は、ねらいに沿った学習ができるような講師を探したり、講師と内容の事前打ち合わせを十分に行ったりするなどの配慮が必要である。</p> <p>(2)単発的な講演会だけに終わらせないよう、オリパラ教育をいかに学校教育のカリキュラムに位置づけていくかが課題である。</p>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>(1)今年度、第4学年の総合的な学習の時間のテーマに「福祉」を取り入れることができたので、今後も障がい者スポーツや障がい者福祉等について、体験を多く取り入れながら学ばせていきたい。またそこで学んだことは他学年にも情報を発信し、全校に広められるようにしたい。</p> <p>(2)昨年度そして今年度来校してくださった講師の方々とは、来年度以降も交流を続けながら、東京2020大会に向けて児童が生き生きと活躍し、豊かな心を育成できるよう、オリパラ教育を進めていきたい。</p> <p>(3)茨城国体・大会とも密接に関連づけて継続していきたい。</p>